序

仏教の中で、特に禅に見られるように、それが本質的に言うとすることを、あえて否定的、もしくは逆説的な言葉を通じて表現する場合がある。そこでは、真理を直接逆説化するのではなく、それをあえて語らないことに積極的な意義が与えられる。しかしこれは、仏法の内何か究極的な真理が人知を超えたものであるがゆえに語られない、と説明されるだけでは不十分と考えられる。そこでこの小論では、言説が機能するために不可欠な背景である条件を念頭に、その語られないことの意義について考えてみたい。この、地平とも言べべき背景は、宗教言語を含めた言語の機能をするために不可欠な枠組みでありながら、それ自体は常に非主題的に背後に沈んでいて客体化される。また、その地平自体を主題化しようとしても、まだその背景となる別の地平が必要となり続ける。禅で逆説が用いられるのは、その目指すところがこの客体化を許さないものに係るからだと考えられる。沖永宜司

─ウィドゲンシュタイインの規則論を中心に

─禅言語の逆説構造

─研究論文─
問人が発せられる条件

逆説の中から導かれる傾向が強いらざるを得ぬ。このことは、「仏法」が言い表せ
ない理由であると同時に、その「仏法」への問いがそもそも発せ
られるための根拠の方へと視線を転回させることになるので、まず考
察の課題としてみた。「本来無一物。何處か塵埃有る。」という言葉
が、悟りの心が「明鏡」またはそこへ達するための道が「払拭」と
して示された方で、修行者としては理解しやすい。さらに対
して慧藻の顔は、「無」、という否定がそのまま肯定に用いられ
いること、またしだいに「塵埃」の成立から否定されているとい
う、一見極めて不可解な面がある。そこで、「無」を否定と
して扱うには、「無」を否定的な名辞たるめ、我々にとってそ
の現象を

彼の規則論が必要な示唆を与えてくれる。しかし、「空の次元は、修行者に

どのような機能を有する形で既に与えられた。意味の構造の方を問

てる必要がある。同時に、「塵埃」が問題にならないた

ために根拠の方が問い直されたくてならない。つまり、「塵埃」

を払って「明鏡」を保つのではなく、対象をそのような対象たらしめてい

る。我々が既にその中にいる根拠の方を突くものである。

これに類似した逆説の構造は、典型的例としては錦木大拙が「金剛般若

文の中にも見られる。」（金剛経）は慧藻が五祖弘忍の下に入

起因としても知られている。「金剛経」は慧藻が五祖弘忍の下に入

っての説話があった。普通若藻藻というのは、すなわち般若波羅蜜で

表される。「A」をそれぞれまでのAとしている基底の方を否定
し、その否定に即して初めてAが本来のAとして肯定されるよ
うになる。すなわち、Aは「非ず。故にAと名づけられる」という形で

如何に生死を離れるかという問いから、君らの思う通り、と

いう生死なるものはどこにあるのか。という問いに反転する。
「我々にとって、事物の最も重要な相は、その平凡さと日常性の中にある。事象の変容は、事象の変容と互いに連続している。こうした構造化された、かつ可変的な規則によって成り立っている。我々の言語は、対象として置かれており、規則の網の中を飛ぶことが可能である。こうした構造化された、かつ可変的な規則によって成り立っている。我々の言語は、対象として置かれており、規則の網の中を飛ぶことが可能である。」

「我々の言語は、対象として置かれており、規則の網の中を飛ぶことが可能である。ここのことから、規則は言語構造を成立させるための条件であり、例えは、「我々の言語は、対象として置かれており、規則の網の中を飛ぶことが可能である。」

「我々の言語は、対象として置かれており、規則の網の中を飛ぶことが可能である。ここのことから、規則は言語構造を成立させるための条件であり、例えは、「我々の言語は、対象として置かれており、規則の網の中を飛ぶことができる。」

「我々の言語は、対象として置かれており、規則の網の中を飛ぶことができる。ここのことから、規則は言語構造を成立させるための条件であり、例えは、「我々の言語は、対象として置かれており、規則の網の中を飛ぶことができる。」

「我々の言語は、対象として置かれており、規則の網の中を飛ぶことができる。ここのことから、規則は言語構造を成立させるための条件であり、例えは、「我々の言語は、対象として置かれており、規則の網の中を飛ぶことができる。」
ことの真理を明らかにすることは、あらゆる人々にとって重要なことである。ことが言える。したがって、有効な問いかけをすることで有意義な答えが得られる。が言う。「数字学の問題点」は、何の理論エルとしており、それには、言語の一つとしての根拠がある。我々の言語が、そのものであるからこそ、基本的な論理に対し、根拠が示される。ことが言える。したがって、有効な問いかけをすることで有意義な答えが得られる。が言う。「数字学の問題点」は、何の理論エルとしており、それには、言語の一つとしての根拠がある。我々の言語が、そのものであるからこそ、基本的な論理に対し、根拠が示される。ことが言える。したがって、有効な問いかけをすることで有意義な答えが得られる。が言う。「数字学の問題点」は、何の理論エルとしており、それには、言語の一つとしての根拠がある。我々の言語が、そのものであるからこそ、基本的な論理に対し、根拠が示される。ことが言える。したがって、有効な問いかけをすることで有意義な答えが得られる。が言う。「数字学の問題点」は、何の理論エルとしており、それには、言語の一つとしての根拠がある。我々の言語が、そのものであるからこそ、基本的な論理に対し、根拠が示される。ことが言える。したがって、有効な問いかけをすることで有意義な答えが得られる。が言う。「数字学の問題点」は、何の理論エルとしており、それには、言語の一つとしての根拠がある。我々の言語が、そのものであるからこそ、基本的な論理に対し、根拠が示される。ことが言える。したがって、有効な問いかけをすることで有意義な答えが得られる。が言う。「数字学の問題点」は、何の理論エルとしており、それには、言語の一つとしての根拠がある。我々の言語が、そのものであるからこそ、基本的な論理に対し、根拠が示される。ことが言える。したがって、有効な問いかけをすることで有意義な答えが得られる。が言う。「数字学の問題点」は、何の理論エルとしており、それには、言語の一つとしての根拠がある。我々の言語が、そのものであるからこそ、基本的な論理に対し、根拠が示される。ことが言える。したがって、有効な問いかけをすることで有意義な答えが得られる。が言う。「数字学の問題点」は、何の理論エルとしており、それには、言語の一つとしての根拠がある。我々の言語が、そのものであるからこそ、基本的な論理に対し、根拠が示される。ことが言える。したがって、有効な問いかけをすることで有意義な答えが得られる。が言う。「数字学の問題点」は、何の理論エルとしており、それには、言語の一つとしての根拠がある。我々の言語が、そのものであるからこそ、基本的な論理に対し、根拠が示される。ことが言える。したがって、有効な問いかけをすることで有意義な答えが得られる。が言う。「数字学の問題点」は、何の理論エルとしており、それには、言語の一つとしての根拠がある。我々の言語が、そのものであるからこそ、基本的な論理に対し、根拠が示される。ことが言える。したがって、有効な問いかけをすることで有意義な答えが得られる。が言う。「数字学の問題点」は、何の理論エルとしており、それには、言語の一つとしての根拠がある。我々の言語が、そのものであるからこそ、基本的な論理に対し、根拠が示される。ことが言える。したがって、有効な問いかけをすることで有意義な答えが得られる。が言う。「数字学の問題点」は、何の理論エルとしており、それには、言語の一つとしての根拠がある。我々の言語が、そのものであるからこそ、基本的な論理に対し、根拠が示される。ことがある。
我々は普段、この概念枠に従うことによって、様々な事実を構成、認識し、外見の実在性を認めている。しかし、その実在性の根拠はどこにあるのか。それは、この有機的に構造化された枠組みを用いることで、その中に事実が都合よく描き出される。説明、判断されるという、その発見性にあると考えられる。逆に言えば、この便宜性以上の根拠は、ただ衆生が、そうした事実の実在性の背景が無観であることに気づく、暗黙にそこに従い、その枠に書き立てることにより実在化される対象に注がれている。つまり、衆生はこれらの場合枠を従うことで、「因」への忘却から、「根」に実在性に求めることなく、無観を厳格にして常を求める間でないである。菩提や常がないのではなく、その原因を求める間で不ありとするなら、それは、私が根拠に従ったこの枠組みを基に、その中に組み込まれている事柄について本質的な根拠を求める際にも積極的な意味はないと考えされる。むしろ、

そうした問いの一方で、答えのない処に無理に答えを出そうとするものに他ならない。

そうなると逆に、例えば仏教ということも、それを積極的にも

観てるらしくいう規則から初めて生じているものであるため、突

げたし PEM 規則を変換することを、それを遂行するためのものと

考える。つまり、仏教を有によって克服するのではない、虚無がそ

のたることによって実際に生じているのである。

慧能に話を戻せば、彼が弟子に説めたのは、この隠されたまま

にになっている規則の網目の根拠を、無観に意識化させる実践的な修行法であったと考えられる。彼は不立文字の立場を

そのまま変換はしない。なぜなら不立文字と語るだけ、既に語

らない事柄を拒否することだからである。したがって、慧能は

不立文字と全く逆に、十六対の直読的義理の使い方切り、つまり

おどろくと意識的に言語化を行っているのである。

これが規則の側に気づいては実験だからである。

「いさやと意識的に言語化を行っているのがである。それらが規則の側に気づいては実験だからである。」

そして人由れば、仏教に近づけ未完を語らせば、答ええ方えが

明はそので、仏教はそのせいか明のいうそれが明に無観たこと、

このように、根に当たる事柄について論書するのでなく、因
三 意外性の感觉

これまで能能の対法が、規則の意図的な意識化による世界の相対化であることは図示した。すなわちは、相対化によって世界に内身しつつ対応するものとして規定されるなら、たちまちそれは相対立する項目で提えることができる。 CSA ないしその相対性を越えるという重視線を切る結果になる。なぜならば、あらゆる規則に相対化をほどこすことは、それが否定的に与えられるからである。もしや絶対ということさえ問題にされないようなあらゆる現在を生き抜くこと、そこは観自体が無意味化される中で、しかも特殊の解放感が規定される現象である。これ示、規則の無根拠が一方的に暴露される事態に置かざるをえないのである。
説明

図は、ある図形を表している。この図形は、いくつかの要素を組み合わせて構成されている。

図の左側には、要素Aが示されている。要素Aは、図形の中心に配置されている。

要素Aの右側には、要素Bが配置されている。要素Bは、要素Aに対して対応する。

要素Aの下部には、要素Cが配置されている。要素Cは、要素Aと要素Bとの関係を示す。

図の右側には、要素Dが配置されている。要素Dは、図形の外周に位置している。

図の上部には、要素Eが配置されている。要素Eは、図形の頂点を示す。

図の下部には、要素Fが配置されている。要素Fは、図形の底面を示す。

全体的に見て、この図形は、要素A、B、C、D、E、Fの関係を示している。